明治三十一年十二月二十六日郵便信書認可
明治三十三年七月十五日發兌

佛教時報

第三十五號

目次

社說
◎世の仁人に訴ふ
◎佛教婦人會に對する希望
論說
◎所感　鈴木券太郎
社會
◎清澤氏の大谷派教育意見◎大谷派教育商議會◎佛骨奉迎に關する準備◎眞宗東京中學卒業式◎德山女學校◎福田會惠愛部◎悲田會
雜錄
◎北遊襍記　文學士　本多高陽
信家
◎おもひやり　文學士　本多辰次郎
今晉
◎故稅所敦子刀自　下田歌子
會報
◎近角氏の消息◎能登押水佛教同盟會◎近江伊香佛教同盟會◎第九回佛教夏期講習會開會式

明治三十三年度寄贈

大日本佛教徒同盟會綱領

一、佛教本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道德を涵養し品性を陶冶する事。
二、佛教の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
三、佛教護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
四、各宗僧侶を奬勵し、其學德を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
五、政教問題を研究して、政府をして公認教制度を立てしむる事。
六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
七、佛教の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を奬勵して、善良なる家庭を形作らしめ又社交を融和せしむる事。
八、積極的方針を取り、實業道德を鼓舞する事。
九、教界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
十、社會に於ける一切の迷信を剿絶する事。
十一、殖民傳道を奬勵する事。
十二、佛教の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講する事。

政教時報第三十四號目次

社說　教界の最大急務
社會　印度飢饉の慘狀◎北清の騷亂等
雜錄　漫筆（石川理學士）◎窮兒惡化の狀況
信家　克己の心（渚澤文學士）
會報　各地巡回記事

本誌廣告

一、本誌は毎月二回（一日、十五日）發行とす
一、本誌は一切前金にあらざれは御注文に應せず
一、本誌代金は必ず小爲替にて遞送の事但し郵券代用の節は五厘切手にて一割增の事
一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全國
金貳錢五厘	金五錢	金參拾錢	金六拾錢	無遞送料

◎廣告料五號活字一行（二十七字詰）一回金拾錢

一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛教徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地
發行所　大日本佛教徒同盟會出版部

明治三十三年七月十四日印刷
明治三十三年七月十五日發行
發行兼編輯人　上村幸三郎
印刷人　清水朝太郎

政教時報

世の仁人に訴ふ

印度饑饉の慘狀は今や其頂點に達せり、曩に渡天僧大宮孝潤師が其師與田公脇師へ送り越れし書簡の一節は、實見の上能く其慘狀を描かれければ吾人今茲に借りて紹介すべし

先日孟買を發してより、印度中部のジャバルプール邊迄は渺漠たる原野及び田圃悉く乾燥し焦枯して農作物は勿論、只一本の青草さへ無之宛も半沙漠を見るが如く僅に樹上に綠葉あるを認むる位に候へ共其樹木さへ大半枯死せるもの多く、而して烈日赫々、炎威爍くが如く吹寄す風は暖熱火の如くなるに沙塵空に漲りて煙の如く、其中に此處に百人、彼處に二百人位づゝ群を爲せるものあるは是れぞ飢饉に迫り居る老幼男女が相ひ打ち混じて、一日僅少の賃銀即ち

男には一日金六錢
女には一日金五錢
兒童には一日金三錢
（是れにて一日の食を求めしむ）

勞働し得る者を得て道路の修築等に從事し居るものにて其狀宛然、焦熱地獄中に餓鬼道を現出したるものゝ如くに有之、中部のシャバルプール驛以東漸やく所々に僅かの綠草有し、夫より東部に近き佛陀加耶に到るべきバンキポール驛邊より以東漸やく通常の原野、田圃を認められ候へば今回の飢饉は全く中部より西部、西北、西南部に渉りて其範圍頗る廣く今尙天候の變化を知るに由なく、此焦土が何時に至りて曩きの濕潤の地に變じ、再び農作物を收獲し得べきや期するに由なく候得は飢饉益々甚敷先月頃より既に一百二十五萬人を增加したりとのことにて其總計は五百萬人なりと云ふと殆んど救濟の道なく憫れ至極に有之候

而して、これ一月有半前の實景にして、爾後益饑饉の大惡魔は其毒焰を逞くし、肉落ち骨立ち眼凹める五百萬の生靈は呼ぶも叫ぶも、救ひの手は達せずして、空しく天を仰ぎ地を睨んで死を俟つの外なしと云ふ、如上の悲境を見聞するもの誰か一片慈悲の眞情に打たれざらん、英米獨等の諸國民も奮發して救助金を贈與せりと雖も、到底大惡魔の猛威に當る能はざるなり、嗚呼同しく亞細亞に國し、共に釋尊の遺教を仰ぐ、吾人佛教徒安んぞ彼等の慘狀を傍觀座視すべけんや、希くば我佛教徒よ、慈悲矜愛の眼を放ち手を伸べて、かの印度の飢民を救へ、謹んで訴ふ、

佛教婦人會に對する希望

流行か機運か、近來各所に諸種の婦人團體出來り佛教に由りて、安心立命の地を求めんとするもの、佛教に由りて社會の腐敗を救濟せんとするの念切なるものあり、之れ一は世人が宗教の必要を感ずるの念深きを加へしにも因るべし、又一は日本婦人も昔日と異り漸く交際場裡に出づるに至りたるの故にも由るべし、其原因動氣は何れに在りとするも、畢竟するに、成るべく永續し、成るべく發達せしめざるべからず、夫

には諸種の注意肝要なるべし、今の日本は猶全く婦人のみ獨立して經營する任に堪へざるか、殆ど總ての婦人會には或は男子が先に立て斡旋するあり、或は顧問黒幕となり居るあり、之れ抑謂れあることなれば、心ある男子は善く輔助して顧問となり、監督となり婦人會をして有終の美を濟さしむべし、然れども又あまりに世話をやき、干渉して折角生しかゝりし所の獨立心の萠芽を枯死せしめて、婦人自心の會の事すら、全く男子に依賴する如き狀態に至らしむべらず、是余輩が婦人會の爲に羅す所の諸士に向て希望する點の一なり、且婦人は元來情に敏きものなり、情的自然として娯樂を求むるものなり、然るに我邦の婦人は從來多く交際場裡に立つの習慣あらざるを以て、唯萬事差控へ居るを主として、遂に其欲することをも言ひ得ず爲し得ずして、遂に其會合を樂みとせず、却て窮屈なり氣兼ねなりと感じ、遂に成るべくは出席せざるに至り、娯樂は却て觀劇等の野卑なる所に於て求むるに至る、是誠に歎ずべきの至なれば、成るべく高尚なる趣味ある娯樂を得べからしめて、會員は義務的に出席するにあらずして、互に指折り數へて會日の來るを俟つ如き組織ならしめんこと、是余輩が婦人會に對する希望の二なり、多くの婦人會を見るに會員は概ね賓客なり、聞き手なり、受身なり、遠慮勝なり、是決して滿足なる組織といふべからず、余輩は各會員は皆主人たり、語り手たり、働き掛けとなり、互に胸中を打明くるに至らん事、是余輩が婦人會に對する希望の三なり、男子の間に在りては大に封建時代の舊思想も去り、貴族的感情、階級的思想等共に減じたる傾向あれども、婦人の間には猶是等の舊思想は容易に減却せざるなり、假令表面には上手に裝ひ居るも、心底には是等の思想の蟠り在ると明なる事實なり、佛敎の本旨は斯る階級的思想を許さゞるものなり、社會の大勢も亦斯る舊思想には反對しつゝあり、況や會自身に於ても餘り階級的思想の勢力ある間は會員互に親密和合あるを得べからざれば、隨て愉快少くして、到底其會の隆盛を希圖すべからざるなり、故に佛敎主義の會合に於ては如何なる身分の人も恰も百川の海に入りて同一鹹味なるが如く、貴賤となく貧富となく、對等均一に淡泊に相語り相交られんこと、是余輩が婦人會に對する希望の四なり、以上は余輩が現今數多き佛敎婦人會に希望する所の重なる點なり、要は唯永續と發達とを圖り、併せて其効益をして婦人社會に活力を與へしめんと希ふのみ

論說

所感

鈴木券太郎

余は我國の宗敎家就中佛敎家と交を結ぶと玆に多年、是を以て敎界の大勢は粗ぼ觀察することを得たり、而して吾人の常に遺憾に耐へざる所ありそは他に非ず、曰く舊佛敎家は遲々として未だ頑夢を破らず又青年佛敎徒は時世の潮流を趁ふて叨りに急激に逸する傾あり、二者俱に其正鵠を得たる者に非

ざると是なり、吾人は佛敎家たる者は大に鑑みざる可からずと反省を促さむとするものなり、吾人は今日多年經驗せし一班を述べて後進者諸君の爲に告げんとす、

社會腐敗の聲は近來に至り特に甚しく或は口に或は筆に其溷々濁々の現狀を訴ふると切なりと覺ふ、就中青年輩は自己の理想否空想を逞ふして曰く「他日社會に出づるあらば雄飛一番迅速に社會を改良し去らんとす」と、實に一擧手一投足の勞克く社會を左右し得らるゝ者の如く思惟し、自己の理想を以て眞理の標的となし若し理想に契合せざる者あらば、事の是非善惡を顧みずして之を排斥し、其の甚しきに至りては大膽にも親父を罵倒して曰く、老爺の頑固亦如何ともすべからず、吾人は第一着手に老爺を感化せざる可からずとは嗟思はざるの甚しきものと云はざるを得ず、之に反して舊佛敎家は一概に排斥の思想を懷き濫りに新潮流を拒否せんとする者の如く而して青年者の言に反抗して曰く、乳臭輩の如きは徒に机上に空理を弄し處世の道をも知らずして吾輩を罵倒する如きは實に僭越の言と云はざる可からずと、誰か鳥の雌雄を知らん、

抑青年者流が數年間修めたる社會學何の爲にする所ぞ、況や其大半を遊惰に消費したるものに於てをや、數年の修學處世の道に何の益かある、社會は青年輩の考ふるが如き斯かる單純なるものに非らず、口を開けば溷濁と呼び、筆を採れば腐敗と罵倒し去るも其溷濁腐敗の渦中に一大眞理の炳然として存するものあるを奈何せん、青年者流は沈思一番して可なり、然れども道義的立論より云へば、腐敗は腐敗に相違なきも蓋し何れの時何れの代か能く諸氏の理想に適すべき社會を求め得るか、古今の歷史を通覽せば思ひ半に過ぎん、而して諸君は果して現今の社會を腐敗せり墮落せりと嘲罵するの權利ありや、否實に諸君も亦其溷濁界中の一分子に非ずや、斯の如き溷濁極まる分子の集合是れ社會なりとせば社會の溷濁も亦免る可からず、然れども諸氏は幸に濁浪の社會に接近することを未だ少く、稍々精神を强硬に維持するを得るを以て僅に濁浪に沈溺せざりしのみ、否動もすれば一歩を誤りて是等の溷濁に精神を誘惑さる恐なしとせず、是を以て吾人は社會の墮落を救濟せんと云ふ空想よりも翻て自已を救正せよと絶叫するものあり、

諸氏の如き苟も感化事業を爲さんとする者は、先づ精神の修養を專一にし、然る後社會の兩面を能く洞察して共に世に處するの道を講じ、何れの方面にも一大眞理の横はるとを看破し其一方面のみを以て直に眞理なりと速斷を下す如き誤謬に陷ることを避けざるべからず、蓋し處世の道は經驗に富むに在りて机上の空論頭腦の妄想は益なくして害あるのみ、寧ろ其豐富なる經驗を以て一大難局の眼前に躍如し來るも、從容逼らざるの間に於て事をなさゝる可からず、然るに世の所謂改良論者なるものゝ足跡を追ふに何れも空理の一面に傾注し急激之を爲さんとし、裡面に潛在する眞理あるを知らず、是れ失敗に終る大原因たらずんばあらず、

又所謂監獄改良論者の如きも殆んど其揆を一にする者と云はざるを得ざるものあり、何となれば彼等は單に監獄内部にのみ其視線を注ぎ、監獄と唇齒も管ならざる否其收容者を生ずべき根元たる社會は措て問はざるものゝ如し、是れ蓋し今回の眞理を認めずして、徒に勞する者と云はざるを得ず、故に其結果として彼等が改良し得たる所の者は、唯外部の改良に止まりて未だ眞正の改良なりと云ふべからず、彼等の主として主張する點は他に非ず、曰く監獄を改築せざる可からず、曰く衛生に注意せざるべからず、曰く水道を敷設せざるべからず、曰く可及的宏壯の建築ならざるべからず、電燈を用ひざるべからず等と云ふに在り、吾人は論者の如き物質的表面の改良に汲々たるの意其那邊にあるかを求むるに苦む、斯の如くにして果して監獄は改良し得らるゝ者なりや、其結果として社會は改善し得るものなりや、吾人は監獄改良は此點にあらずして寧ろ他點にありて存すと思惟す、而して教誨師も亦然り、彼等は唯罪人あるを知るのみ唯形式的教誨を爲すことを知るのみ、形式的教誨果して何の効かある、如何に滔々懸河の辯を弄するも田舍人等は唯是れ一の辯者なりと感するの外更に心性の改良に心を用ふる者なきは蓋し事實なり、宜しく教誨をして其効を奏せんとせば、先づ溷濁の社會に投入し十分之か經驗を積み、然る後彼等田舍人を遇せば得る所蓋し大ならん、狹隘なる眼光を以て見たりし當時とは其罪人觀に於て大に徑庭あるを見ん、是を以て教誨師たらんとするものは須らく社會の兩面に精通し之が經驗を積み豐富なる材料を以て、其責に當らざるへからざるなり、恰も溺者を救はんには先づ水中に入らざる可からず、水中に入らんには先づ水泳を習はざるべからざると同一般にして、若し水泳を知らずして溺者を救はんとせば勢俱に溺れざるを得ず、是を以て田舍人を濁浪界中より救濟せんとせば先づ濁流に遊泳せよと勸むる所以なり、

尙吾人の深く感じつゝある者は、日本人の非社會的の行爲多きこと是なり、何となれば日本人は自分の滿足を充すを以て足れりとし、少しも他を省みず公共の念甚しく缺乏するにあり、これ吾人の最も遺憾とする所なり、要するに社會の救濟は一概に現今の腐敗を攻擊するに止らず、勉めて社會觀察の經驗を積み、然る後社會改善の聲を擧くるも未だ晩しとせざるなり、平素所感の一斑を述べて聊か諸君に警告したる所以也、

右の一篇は本月九日教道講習院内至誠會に於て同氏の演說せられたるもの、僅に其大意を筆記したるに過ぎず、殊に編輯怱卒の折柄校閲を經るの暇なく揭けたるものゆへ、責全く筆者にあり幸に同氏を累するなからむことを望む、

社會

◉清澤氏の大谷派教育意見　大谷派本願寺にては頃日派内の教育要路者を招集して教育商議會を開くことは、別項記載する所の如し、記者一日氏を訪ふて大谷派教育に關す

る意見を聞くに、氏徐に語りて曰く、是ぞと云ふ意見もなけれども余が大體の意見は、大谷派を思ふ忠實なる人をつくるにあり、何事も大谷派を中心として運動をなし、極て其中心に遠ざからむことを望むものなり、當路者の爲す事一々善美の事にもあらざるべし、例へ當路者と其意見を異にすと雖も、大谷派を思ひ東本願寺を思ふの念慮は時々刻々も忘る可らず、動もすれば當路者と意見を異にする爲め、大谷派を遠ざかるの念生ずるは人情自然の逆發する所なれども、これ謂れなき誤謬にして決して一派の爲めに忠實なるものと云ふべからず若し誠意誠心より大谷派の盛衰を双肩に擔ふの士あらば、一派の興隆は勿論佛教振興の要件たることは明白なる事なり云々、滔々として談論盡きざるが如く着々として時弊に肯綮するものあり一々之を紙上に紹介するは、少しく憚る所なきにしもあらざるを以て、以上の要點に止めおかん、記者は更に話頭を轉じて、得度式のあまり無意味にして早弊に失するの憂ひなきやを問ひぬ、否とよ決して早弊に失するものにあらず、人の生るゝや直に籍を其國に置くと一般にして、眞宗の如き相承を重ずる宗門にありては、毫も現今の制度を以て尙早の害はなかるべし、無意味に籍を其國にをくも成長の後、常識を欠かざる以上は誰しも愛國心を失はざるべし、無意味に得度を受け僧籍に列するも宗門教育を受けたるものは決して護法の勇猛心は滅却せざるべし、よし有爲の青年は攀鱗附翼の才俊を羨んで功名の念勃々として禁する能はず身を俗界に投じ、亦力を教界に効すもの少きを見て、得度を急くの弊害ありと云はるゝか、そは得度を急く得度其者の罪に非ずして、其人の性情如何にあらむ也、丁年以上にして、得度を受くることせむも必ず好果を奏することは豫期しがたかるべし、寧ろ幼童にして得度を受け身を桑門に籍り宗教的家庭を完うしたらむには、得度尙早の弊は一朝にして打破することを得べしとて諄々倦まず時の移るをも覺えず說話せられたり、記者が此有益なる談話をきゝしより多くの日數を過ぎしを以て僅に其記臆を呼び起して一端を書きつゝるのみ、多少の誤謬は免れざる所、こゝを以て累を同氏に及ぼさゞらむことを希ふ、

◉大谷派教育商議會　同派本願寺にては去る十二日より一週間の豫定にて、教育上に關する商議會を開きつゝあるが、該會の性質たるや政府の高等教育會議に擬したるものなるべし、未だ其結果の如何は知るに由なきも、大中學の問題、留學生規程抔は其重もなる議案なるべしと云ふ、今回召集せられたるは皆何れも錚々たる人々にして東京よりは南條、村上、清澤の諸師を初め、其他新進の學士連中にして京都にては重に同派大學卒業生を召集し以て該會を開かるゝこと故二十餘名にも上るならんと云ふ、從來教育上に對してかゝる諮問會ありしも多くは老朽連にして、教育の何物たるを辨知せざる輩にして、殆んど何等の効益なくして終りぬ、今回の商議會は蓋し刮目してみるべきものあらむ、吾人は當路者を、して教育の重大なるを知らしむると共に、徒に形骸に走りて其精神を失はざらむことを希望す

◉佛骨奉迎に關する準備　佛骨奉迎使の一行は去る

十一日長崎に着せられたりと云ふ、既に京都よりは各宗總代として夫々五名の委員を撰定して長崎に出張せしめ盛に準備をなしたるとぞ、奉迎事件に關して九州全道の各宗派寺院共同して、大法會を長崎市皓臺寺に執行せらるゝ由、因みに佛骨の京都に着するは來る十九日にて同日午後十時梅田發瀛車にて七條停車場に着し、東本願寺に立寄り約三時間許り法會を行ひそれより妙法院に赴く筈なりと尙奉迎使の一行が長崎へ安着の報あると同時に、本邦駐劄羅公使バジアロングカチエス氏は神戸まで出張し遺骨を迎ふる由

◎眞宗東京中學卒業式　去る十一日東京谷中眞島町の同中學は第四回卒業式を擧行せられたり、本山よりは勸學局次長太田氏の臨場、又文部省普通學務局長澤柳氏も臨席せられたり、當日は最も嚴肅に式を擧げられぬ、學長村上博士は例によりて懇篤なる教訓を卒業生に向て加へられ其他、勸學局次長の祝詞等あり、最後に澤柳普通學務局長一場の演說をなせり、左に少しく之を紹介せん、

比較的宗教學校として完全に組織せられ教育を施しつゝあるものは、大谷派の學校なりとす、諸君は今茲に此學校を卒業せられたり、諸君の榮想ふべきなり、余はもとより諸君の教を請ふべきもの、諸君に對して有益なる談話を試むる能はず、唯一言諸君の卒業の榮を祝せむとを、乃ち諸君は進むで專門の學に就き修養をなさんとするものあらむ、又社會に出て直に布教傳道の實地方面に從事せんとするものもあらむ、要するに布教の任務は諸君の双肩にかゝれり、社會救濟の責任は諸君の勞を俟たざるべからず、國民は今や信仰の飢に叫びつゝあり、信仰の渴を求むる聲は甚だ切なり、苟も宗教家の任務を負ふ諸君にして其爲すべき事をなさず、行ふべきことをなさず無爲徒食にして終らむか、諸君は其罪を免るべからず吾人も亦鳴鼓して諸君の罪を問はんとするものなり、布教傳道の要は多數の人を救濟するにありと雖も、個人的傳道を以て基礎とせざるべからず、然らざれば効果を奏すること甚だ難かるべし、諸君の宜しく注意せられむことを望む云々

右終りて來賓一同に茶菓の饗應ありて散會せり、因に云ふ今回の卒業生は十一名にして之を前三回の卒業者に比すれば最も少數なりと云ふ

◎德山女學校　本校は山口縣都濃郡德山村にありて校主は赤松照幢氏にして同夫人と共に熱心に教育に從事し居らるゝことは、同校學事年報に徵して明なり、本年第十回の卒業生を出せしより見れば本校の創立は既に十餘年前にありしことを知るべく、校舍の設備、寄宿舍並圖書室の設置、若くは衞生等に關しては殆ど用意周到少しの遺憾なきが如し、學科の程度は現今高等女學校の程度に準せられ、而も實用を主として裁縫、割烹、看護法等を授けらるゝが如し、現在生徒は百三十餘名にして、頗る盛大なりといふべし、地方僻遠の地にしてかく教育に力を竭さるゝは文化の發達を想ふと共に校主の如何に苦辛慘憺の狀察するにあまりあり、知事を始めとして名士の參觀陸續として絶ず、時に或は一場の講話を試み生

徒を奬勵せらるゝと云ふ、校主の榮譽知るべきなり、赤松校主は固より籍を佛門におくもの、現今の無能僧侶果して怩怛として耻る所なきや否や、校主の女子教育に關する意見の一節を左に紹介せむ、

（上略）今の婦人は其身初めて偶然此國に生れ出で偶然今日の有樣を成したりと思ふ者もあるべけれども之は大なる誤と云ふべし抑も今の人は何れも父母あり祖父母もあり又た夫より代々の祖先ありて其原に遡れは幾千年前已に此國に出でたるものにして其の當時より一の特性を受け祖先の遺傳を繼續し風俗、習慣、學問、教育の感化を受け以つて今日の婦人の有樣を形づくりたる者なり此特性・遺傳、風俗、習慣及び古來よりの學問、教育の歷史は現今婦人教育の根本にして是に依つて定めたる教育法に非ざれば眞正なる國家の教育法と名くると能はざるものなり歐米諸國の教育法を聞くに何れも其の國民の特性と習慣とに由り教育の歷史を考へて其時勢に應ずるの教育を施すものなり本邦女子教育を論ずる者は多くは本邦婦人の特性を知らず本邦教育の歷史を考ゑず甚しきに至ては從前の教育を以て卑屈なりとし頑固なりとし務めて歐米女子の風を摸倣せむとす如斯の人は已に教育の原理をしらず又た歐米人が自國の民を教化するの主意を解せず徒に歐米末流の風を慕ひて之に倣はむと欲す其の本邦女子の美を損せざらむと欲するも得べけむや近來女子教育熱の旺盛なりし際手を燒きしは全く本邦女子教育の根本義を確立せざるに由る近頃女子教育の呼聲高しと雖も其の教育者に乏しきを如何せむ予は信ず眞正に女子教育の理想を懷抱する教育者の寥々たる今日に於て輕擧にも女學校なぞを起さば必ずや其の結果は失敗に歸せむ（下略）其意見の着實にして妥當なる頗る教育家の反省に値そべきものあらむ、女子教育の頗る不結果にして終るは豈此理由に基くことなしとせむや

◎福田會恵愛部　福田會育兒院は我國慈善事業の最も古き歷史を有するものなるべし、吾人は同會の經歷に付ては聞くに從ひ報道を怠らざるべしと雖も、今同會內婦人の發起にかゝる恵愛部の趣意書を得たれば都下に於ける佛教婦人會の一として左に之を揭けむ、詳細の事は折を得て再記することあるべし

凡そ憐てゝふ事の多かる中に子を生みて育つると能はざるより憐なるは無し生とし生けるもの何物か吾が子を愛し育てざる」況や萬物の長たる人の或は貧に沈みて子を養育そると能はず或は病に沒して子を見屆くると能はざるの不幸に遭てはいかなる强情の人と雖も豈燒野の雉子、霜夜の鶴に若ざらんや」況や生れたる子は未だ何の心もあらず家の貧なる辨へも無きに忽ち棄られて道路の街に泣きしほれ、親の沒せし譯けも知らざる既に孤となりて饑寒の境に苦みさけぶに至りては心あるもの誰か慈悲の情を起さゞらんや昔し佛世尊は印度に於て三種の福田を說き給へり、一には敬田、敬田とは三寶の德を敬ふを云ふ、二には恩田、恩田とは君父の恩に報ふるを云ふ三には悲田、悲田とは貧賤の者を救ひ憐むを云ふ之を福田とするも名づけるは、うも此三種は世に比類なき功德にて無上の福德を發生するの田地なり

と云ふ事とかや」實に貧賤の者中にも貧兒、孤兒はゞ世に賴み無く寄るべ無き者あらざれば之を憐み救ひて養ひ育つるを悲田中の最も急務にして、福田中の最も功德なるべき、往に佛敎諸宗の碩德あり、明治十二年に福田會育兒院を創立して貧兒孤兒を養育するもの今に至るまで凡そ二百餘人、淨財の積みて現在に存するもの貳萬圓餘あり實に近世の美事と謂ふべし

妾等隨喜の餘り玆に婦人惠愛部を設けて朝野の闔閣を協同し更に慈惠金を募りて此の育兒院を擴張し育兒の事務を管理し兼て婦人の德育を振ひ起さん爲めに月並數回の法筵を開き諸宗の碩德を請じて甘露の法味に霑はんとす」あはれ慈惠の情深くして道德の志厚き善女人たちよ淨財を喜捨して自他平等の法益を贊成しとよ無き善根を悲田の中に植ゑて世間無上の福德を發生せしめ給へと謹て白す

田中寅子　原禮子　高島倉子　佐藤靜子　辻里子　何多仁子
男爵夫人　楫取美輪子
子爵夫人　三浦愛子
子爵夫人　鳥尾泰子
侯爵夫人　德川良子
公爵夫人　毛利安子

◎悲田會（犯罪豫防事業）　同會より其趣意書並に沿革等詳細に報告されたるを以て、揭げて江湖諸氏の一讀を煩はす

横濱の地たる日進月歩益繁盛に赴き駸々として殆ど止まる處を知らざるが如し是を以て他地方より入込むもの商工に勞役に各目的を立て丶苟も足一度横濱に至らば千金の富を得る豈に難からんやと然るに田舍の考へ通り都合よく運ぶものに非ず優勝劣敗の勢ひ强く未だ此地の眞味を解せざるものは忽にして多少の懷金を消費し盡し所謂立チン坊となり果てたるが最後容易に頭を擡ぐること能はざるのみならず日々の衣食に逐はれ心自然に卑陋に陷り己のが勞働の先々に於ひて或は砂糖を箒溜め之れを袖にし或は南京米の落散たるを腹掛の井に入れて歸るが如き微罪を犯し監獄署の厄介となるに至り而して放免の上は一層の艱難に遇ふも元より知らぬ他鄕のこと丶て誰れ救ふものもなく一度魔風に誘はれたる身は犯罪又犯罪遂に浮む瀨のなき憫れ至極の結果に陷る者多きは實に此地の悲劇にぞある殊に注意を要ぜべきは未丁年者にして父母の遺棄に逢ひたる者乞丐の群に生育し其長するに及んで眞に犯罪者の仲間入りをなし果ては監獄を以て糊口し易き樂土として出入を恣にするの徒多き常に司獄官の憂ひとするのみならず國家社會の不幸及彼等が无耻豈慨嘆に堪へんや本會玆に觀るあり之れが救濟事業の第一階として出獄人保護の事をなし進んで惡少年感化の事を行はんとす

△創立及沿革　明治三十一年秋數多出獄人の中最も憐むべき女囚の歸着する處なく偶監視の引受をなすものありて出獄したりしもと同監者にして醜業を營むもの少女身を汚さる丶に忍びず其家を去て操を守らんが其居處を如何せんと小き心を痛めたるの結果は心太くも無斷家出し東京に來り豫て聞きつる知人を尋ぬるも尋ね當らず空しく歸りたる上は監視違犯罪の免れ難き遂に自首して再び其刑に服したる者ありき時の

敎誨師野々山廣闇深く同情を寄せ其將來を慮り之れを引取り同地北方なる某洗濯業者に雇ふこと丶なしたりき是れ本會の起る由來にして翌三十二年五月に至り同人の周旋より出獄後其處を得たるもの四五人に及びたるを以て同僚敎誨師土倉、春愛、二氏及大谷派出張の伊藤布敎師等の贊同する處となり玆に悲田會の名を揭げ規則を制し前きの趣旨を以て江湖に訴ふるとゝなれり時に典獄有馬四郎助氏は非常なる贊成の意を表し大に力を添へられたり於是一面地方官の同情を求め一面宗敎家の仁慈に訴へたるに大谷派總務大谷勝縁師は特に創業費として金百圓を寄附せられたり次て發起者に加はりたるものは乾、松岡、本鄕、栗田、藤田、大塚の數氏にして各若干金を醵出し假りに同市戸部町四丁目に於て事務を取扱ひ野々山敎誨師之れが主管として專ら事業に從ひ各發起者は熱誠を以て會の成立に忙はしく殊に藤田仲次郎氏は身小學校主たるの任を負ひつゝ日々奔走同志の勸募に竭力せり十一月下旬横濱會館に於いて本會の目的事業等紹介の爲め演說會を開き大に社會の同情を喚起せり是の時に當り淺田同縣知事渡邊地方裁判長李家書記官西岡從三位鈴木、大塚兩代議士南條、村上兩博士島地大內の大家諸氏大谷平沼の豪商を始め其他有力者縣會議長栗原宣太郎氏始め議員諸氏郡市町村長多數名譽職員諸氏の贊成を得るに至れり然れども猶寄附金募集等のことをなさず主管者の工夫に任せ只管實蹟を擧ぐるに努力せり、超へて三十三年三月縣當局者諸氏の認むる處となり縣參事會に於て本會々費補助として縣下監獄全體の糞尿及洗流し全部其代價下渡しの決議あり內務省も亦之を容れ乃ち四月以來右賣却價格約四十圓（一ケ月）の收入あるに至りたるは實に本會の榮譽とし且つ經營上頗る利便を得て大に感謝する處なり、是より先き事業上の都合を以て事務所を同市石川仲町一丁目三十七番地に移し二階建家屋一棟を借り入れ階下を事務應接所食堂等に階上を被保借人寄宿所に充て大に面目を一新したり

△組織　本會の性質は個人事業にして未だ數多の役員を置かず目下事務主管一名のみ內部の補助をなすものは妻女にして外部の補助の者は各發起者及各贊成員諸氏なり殊に藤田氏は內外に亘りて主管者の勞を分たる丶こと多しとす

但し目下財團法人となすの內議中なり

△維持　本會の維持は一萬圓の基本金を積み其利子を以て經營するの目的なれども未だ廣く寄附金の募集をなさゞるが故に目下の經濟は頗る窮迫せり、一定の收入は只前記糞尿及洗流し代金あるのみなり、但し本會は廢物利用の旨義を採るを以て同情者より其寄贈を受け之を製糊して利潤を計れり、今や成蹟の稍や見るべきものあるを以て本縣監獄署員諸氏は各自月俸十分の一を割ひて寄附せらるゝの約あり實に本會の感謝するに堪へざる處なり

△事業及成蹟　刑餘の人は社會の擯斥を受くるが爲め就業上頗る困難を感ず故に本會は之れが保證人として雇人口入及日稼等の周旋をなし主家に起臥せしむるもの（監視ある者は滿了の上）寄宿舍より通勤する者及自宅坐業する者との三種別

を設け其技能に應じて職を授くることに勉め專ら自營自活の興味を解せしめん爲め寄宿舍に在る者には當番を以て自炊せしめ渡世の方法を習得せしめ獨立の基礎を作らしめんと勉む而して其收支は之れを主管者に於て監督し貯蓄を奬勵せり、今其成蹟の一斑を記さば當初より保護を加へたる者未丁年廿一人丁年十八人計三十一人なり内七名は就業後一週間以内を以て逃亡し其内二名は再入監するに至れり是れ本會の大に不面目とする處にして又多くは未丁年者に屬するを以て益々少年感化の難きを認むると同時に其必要なることを深く感じたり又九名は一時就業せしめ而して其親屬等に交渉を重ね懇諭の上歸鄉せしめ殘り十四名の内嫁したる者一名聟養子となりたる者一名一家の生計を立つるに至りし者二名商家雇人四名通勤諸職工六人死亡一人也如此は未だ以て最上の蹟と云ふべからずと雖ども漸次經驗するあらば猶好果を收むべきことを確信せり

△施療　本會の大に多とする處は罹病者に對する施療あると是なり被保護者中肝臟病に罹りたる者月餘北原新氏(法語會紹介)の施療を受て脚氣病其他にて近藤病院の施療を受けたる者前後三ヶ月に亘りて全治し鈴木元士氏の施療を受けたる者一名あり目下心瓣膜病者にして飯田春畦氏の施療を受けつゝある者あり如此は實に本會の至幸とする處なり

△建築　本會事務所及寄宿所等狹隘なるを以て自然感化上にも影響する尠からず依て目下久良岐郡中村に地をトし建築工事に着手せり(目下事務所は横濱市石川仲町一丁目卅七番地)

雜錄

北遊襍記(承前)

本多高陽

何人も承知の通り、北海道には生へ抜きの人は至りて少い、皆幾百里といふ海山超えて渡りて來た人である、其幾百里といふ所をヤッテ來た事情は千差萬別人に由りて異る事は知れ切た事であるが、何にせよ、生れてから隣り村より外遠い所へは行た事は無い、一夜止りの土地へ行くにも泣き分れをしたり、三日か五日で歸宅れる用事で出掛けるにも水盃をするといふ樣な連中は先づ居ない勘定さ、又生れながらにして親の身代を貰て、オトナシク遊んで居れば夫で十分、餘計に稼いたり、心配したりして働く事は無いなど濟して居る人の少いのも矢張同じ割合である、夫故北海道の人は旅行を好む人が多く、殊に夫婦連れなどで名所廻りなどして命の洗濯をする人が澤山である、で一般に見聞が廣くて話が面白い、僕は青森から先きは、ソーイフ名勝廻りより歸たといふ夫婦連とは二組も三組も同乘して、四國九州の方まで旅行して來た話など中々面白カッタ、殊に之は少し取越した歸途の話であるか尉も媼もといふ程の年でも無いとおこられるか知らぬが、共に五十以上六十以下といふ老夫婦が、若い時分北海道へ渡りて稼いで〳〵、先づユックリした身の上となりて、初めて内地の名所廻りと出掛け、時間を搏はず參詣したり、見物したりして歩くのと乘り合した、其樂しさ加減といふものは、

苦勞知らずの若夫婦の新婚旅行とドチラであらうか、否〳〵コーいふのは僕は日延をして置た新婚旅行を今果すのといふても善からうと考へる、けれども眞正の新婚旅行の樣に他人にチョッ蓄生めと燒かせないのは罪が輕いと言ふものか呵々、扨ドーモ滊車の走り樣はのろし、各驛の停車時間はオソロシク長し、退屈をする要素は具りて居るが、併し乘合が割合に面白かッたから、先つ〳〵厭が來ない前に札幌驛へ着いた、流石は全道の首府だけありて、是まで乘合は殆ど皆下車りて仕舞て、其代りが又ゾロと乘り込んで來て、先樣は一切の入り替りといふ見えが有た、札幌に付てはモー少し言ひ度い事もあるが此日は、此驛はズット澄して素通したから、今も亦素通としやう、此札幌から停車場ナラ五、道程は二十一哩半程午後五時頃小樽區手宮停車場へ着いた、此驛は抑炭礦鐵道線路の終局點で有て、又僕が此度態々出掛た目的地である、滊車から下りると出迎に來て呉れた知人や下男の顔見て先づ何と無う嬉しかッた、夫より全道第一といふ泥濘の道路を導かれて知人の家へ着いた、爾來三週間といふ日子を此地に費したのである、併し其間の事といふものは私用の俗事のみ多くて、此所に披露すべき事は至て僅かである、が併し見聞感のみを述べて見やう、其前に今一つ道中の事を言はうなら、此地に遊んだ人は誰でも氣が付くだらうが、此地方にては往々に滊車道即人道人道即鐵道である事である札幌小樽間の如きは内地でいふなら京濱間といふ場所であるが、概ね人道兼鐵道である、小樽區中ですら、市街の中央を鐵路が走て居る、コーいふ奇觀は他地方では見られまいと思ふ、頑是なき兒女が鐵道上に他愛もなく遊戯して居るのを見ると如何にも劔呑でたまらないが、存外怪我もせぬといふ事である、達者な壯年の男女が年々負傷するにも拘らず、未だ一人も小兒の怪我した者は無いといふのは不思議の樣なれども、實際ソーであるソーな、何は兎もあれ危險な話である、又をかしくもある、此危險なをかしな滊車に乘せられて、目的地へ着いた日は四月七日であッた、

翌日は申すまでもなく四月八日即大恩教主釋迦牟尼世尊の降誕日で、我々佛教徒は大に祝賀すべき吉祥日である、此日は僕が滯在中少からぬ親切を受けた知人兩人と共に出掛けた、末廣座といふ劇場の前へ來て見ると、盛なる賑ひである、演戯の最中かと思へば、ソーでなく、矢張釋尊の御降誕日を祝せんとて演說會が開かれて居たので有た、一寸這入て見やうかと思たけれども、何分先に用事も控へて居り、且は時刻も猶早し、歸途にせんと思ひ直して、通り過ぎて仕舞たが、其日は會場の都合で正午までに終たので、僕は會に過ふ事は出來ず殘念した、此會は北海教報(先日北海佛教と改題せり)主筆多田公嚴氏等が發起で今年始めて擧行したのだソーナ、最少し前に各宗共同で小樽佛教會といふ團體を作た、其會で釋尊降誕會を催したのである、演說者は同會會員たる各宗諸師で、聽衆は同區の立派なる人が多かッたといふ事、無慮千名内外も有たらう、コー云ふ風に各地に釋迦文佛の降誕を祝せらるゝに至るは其だ結構な事で、喜ばしくてたまらない、夫が年

々盛になる計りだとは猶嬉いではないか、此日の演説は聞かず無つたから評しやうもないが、各宗の雄辯家が、各此處一番と奮發してやつたのだから、わるい筈は無い、ドーか是から年々此會が引續いて、行はれてソシテ益盛大になり行くのを祈る次第である、

信家

おもひやり

本多辰次郎

これは自分の身を他人の身に成り替て考へて見るのが一番早い、この工風は心靈修養の上に於ても、又日常處世の上に於ても甚だ大切なことゝ考へられる、凡て古人の批評などするにも、能く其時代の精神になり、其人の位置に座はりて見て考へる時には親切な批評も出來、又其時の事情も能く了解し得る事である、ソーでなくして唯傍目のみでする時は事が不親切になり、當らない事が多くなる、夫よりも今一層適切に効能の多いのは、今日實際我々が身を此世に處して行く上に付て、此心掛のあるのが最大切と考へられる、一寸した事を人と交渉し談判する上に就ても、此心掛がある時は御互に我慢を張りて無理を言ひたり又は他人の迷惑になる事を行ふ事は無いから、事が圓滑に早く纏り易いし、他人から見ても其結果が穏であるに違ひない、明治の初年に當りて、西郷隆盛が征東軍を將ゐてエライ勢で進んで來た、其時故勝伯が單騎官軍の陣營を訪ふて、大西郷に面會して、扨尋ねて言はるゝには、全體官軍の決心は何んでも歟でも德川氏を打亡ぼして仕舞ふ氣か、但しは又朝廷の御趣意が通り萬事都合善く治れば德川家を助けても宜しいのかと尋ねられたら、大西郷が夫は無論朝廷の御思食が通り、聞く事が治るならば固より望む所で、決して德川家を潰して仕舞ねばならぬといふ事は毛頭無いと答へた、勝伯はソコで夫ならば今茲で君と僕と互に位置を置き換へて話をし樣ではないかと言ふと、大西郷も宜しいと替成したといふ事であるが、成る程夫であるから、アンナに手際よく甘く事が治たのであらう、若し此心掛でやるならば、天地の間行くとして可ならざる所は無い筈である、君に對しては忠となり、親に對しては孝となり國に對しては愛國心となる又君父となりては慈愛の心が深くなるとは明かである、世間に姑と婦と仲睦じく行かぬのが多いといふのは、互に其身の位置を爲り替て見るといふ工風が少くて、名々が自分勝手の我慢を、言ひ張るよりして、衝突もするし葛藤も起るのである、妙なもので誰でも本當に我身の本分を盡さうと思ふならば、唯自分の身の上のみを考へて見て居ても、諦に知り難いものである、必ず自分に對する者の身の上に爲り換りて見ると始て明になるのである、例ば身を軍籍に置く人が其軍人たる本分を盡さうとするには、非軍人の位置に自身を於て見れば、國家に一旦外國と戰端でも開けた時は非軍人即一般の世人は必ず軍人を只管に頼みとして國を守り、國威を輝かして貰たいと希望してる事がわかると、自ら卑怯の振舞は出來

ぬ樣になる、又一般世人は軍人が戰地に居て困難なる事を想へば、自ら恤兵の事にも盡力するやうになる、此事は人と人との間には勿論、人と國との間でも、又國と國との間でも、何處へ當嵌めても不都合といふ事はない、是で無ければ、社會が靜謐に治るといふ譯には行くまい、又人々が實際精神の修養として此工風を爲す樣になれば、實に世は安泰で殆ど法律も政治も不用になる位であらう、佛教上に無我といふ事をいふのも、此工風から入る事が出來やうと思へる、

會告

故稅所敦子刀自

下田歌子　演說

今日は故稅所敦子刀自の御追善を兼ねての會でございまして、私は刀自には非常に御生前に御懇意を蒙りましたのでございますから、會員でもございまするし旁々略歷でも御話を申上げて、刀自のことを十分に御承知のない方に御紹介申して呉れよと云ふ御頼みでございましたから、御受を致しましたが、生憎昨日から風邪をひきまして、少し聲が立ちませぬですから、迚も長いことは續きますまいと思ひます、時も移りましたし、略歷と申しましても大變に長いのでございますから――非常に刀自か此終生の間に御積みあすつた、又其御經歷なすつた出來事と云ふものは大變に長うございまして、幾ら掻摘みましても餘程時刻が移らうと思ひますから、唯だ今日は私が一二感じましたこと丈けを御話いたしませうと思ひます

私が刀自の名を聞きましたのは、未だ十歳位の時であつたと思ひます、私は生國に居りまするときに八田知紀先生と云ふ方へ弟子入りを致しまして、(これは維新のつひ少し前)美濃から京都まで歌の御直しを乞ひましたのでございます、其時に第一回の書信に八田先生が私の所に極く子供に解るやうに假名交りで書いた手紙を下すつた、折々直しては上げやうけれども、誠に忙がしいからお前が將來道の親とも、又は極く爲めになる所の有益の友達とも頼むべき人は近衛公の老女千世瀬と云ふ方である、即ち敦子刀自です、どうぞ此方に紹介をしたいと思ふ、話したならば嘸悦ばれるであらうと云ふことを御示し下すつたのが、實て私が稅所敦子刀自を非常に御慕ひ申す初めであつたのでございます、それから程なく維新になりまして、誠に彈丸硝雨の間に掛隔たりまして御目に懸ると云ふ機會のなかつたのみならず、御書信も申上げるともなくつて經過いたしました、さう致しました處が私も未だ極く子供の中に父と共に東京に出ることになりまして、それから年は忘れましたが確か一回御書信を申したと覺えて居ります、それ限りて又年月を經過致しました所が唯今より數へますれば廿六年の昔、明治八年と云ふ年に刀自が初めて辱なき御仰せを蒙られまして宮中に御出仕になりました、其時は今の赤坂御所であつたのでございます、其時は私は未だ子供でございました、子供でございましたが敦子刀自が御出でになると

云ふことを聽きまして大變悅んで居りました、私も其頃は宮中に奉仕して居りました時で、それから御目に懸ります時までの想像は豫て色々承はつて居りましたけれども非常に私は種々の理想を畫いて居りましたのです、私が理想を畫きましたと云ふのは敦子刀自の一首の歌であつたのです、其歌は傳へて早く聽いて居りました、それは維新前黑船の來たと云ふ騷ぎで、彼の生麥の騷ぎのことがあつた時でございます、今日岡らずも――不幸にも服部中佐の追善の吊詞を承つて誠に私は胸に思ひ起すことがまア萬端であるのでございます、唯今の支那の有樣を見ると甚だ野蠻で餘り解らないと思ふやうでございますが、之につけても私は此敦子刀自の歌を想像する、其生麥の騷と云ふものは島津三郎公が率いて來られた所の手勢と英國人との衝突からして、遂に外國人を斬つたと云ふ騷ぎで、大變に日本は英國からいぢめられたと云ふときです、其事を想像すると云ふと實に變りも變つたものでございます、ホンに一場の夢のやうに考へます、其島津三郎公が鹿兒島を出られると云ふ時に稅所敦子刀自が詠まれた歌でありますが私が非常に刀自を理想に畫いたと云ふ歌は

ますらをにあらぬ此身の悲きは
みとものかずに入らぬなりけり

「ますらをにあらぬ此身の悲きはみとものかずに入らぬなりけり」此歌を御味ひなすつて御覽なさい、實に天晴れ女丈夫と私は思ひました、今日でも實に私は感じます、さう云ふ考が嗚呼がましくも起りますね、アヽ實に千載一遇の多事多難多望の國に生れながら何故男子に生れて來なかつたせう、男子に生れて來たならば天晴れ此みとものかずに入つて國家の御爲めの一部分にもなつたらうものをと、其刀自の御心は實に私は今も繰返しますヨ、我が同胞の外地に屍を曝されると云ふことを聞いて實に武士にあらぬ此身の悲しきはと今日繰返しまして、誠に昔の考を惹起しました、其歌を私が心の中に繰返して大變雄々しい方と思ひましたのでした、それから御目に懸つて見ましたところが誠に溫和しい俗に言ふ京女郎と云ふ風な方であつて、物の言樣から起居擧動が誠に乙女らしい方であつたのです、それで私は大變に理想に畫いたとゝ違つて其時は私は子供であつたのであるが、是は大變である、自分は色々のことを聞いたり御話したり嗚呼がましいが慷慨談でも致さうと思つたけれども、斯う云ふ風では大に憚らなければならぬと思つて自ら愼んだことであつたのです、さうして段々御交際を致しました、殆んど一家の人の如き交際を致しましたのでした、實に每日々々御一緒の所に居りまして、さうして西南の役などは丁度敦子刀自と私とは御留守居の役に當りましたので、其譯は他の女官方は西京に親兄弟だちが居られるものですから、西京の行幸啓には其方々が御供になつて、私共は此方に留まつたのです、其留まつた長い御留守中には最も親密になりまして泣きみ笑ひみいたしました、其事も實に今日は彷彿と頭腦に畫かれるやうであるのです、それから段々御話合を致しますると、中々見掛の女らしい溫和しいと云ふことゝ大變違つた方であつて、非常な慷慨家、非常

な愛國家で在られたのでございなす、それから實に其二人で話を致しましたとは、迚も女として貴方かたの前に持出されないやうなことも隔てのない中では言交はしたともあつたのです、それで私は誠に嚴格であつた家庭の敎育を、更に有難いと云ふ感じを惹起されたのも實に敦子刀自の賜物であつて、女子は國を思ふ精神の强いのも宜し、事に臨んだときに死を恐れないのも至極結構であるけれども、日常の起居動作は何んなことがあつても女子と云ふ境涯を脫けてはならぬと云ふ感念は確に刀自から與へられた賜物と思ひます、

其敦子刀自の言行は實に手本とすべきことが澤山でございますけれども、取別け今日私が御婦人方に一言御話申すとは、刀自は少しも女子の最も缺點とする所の妬心と云ふものゝない方であつた、少しも妬むと云ふ心持のなかつたのみならず、謙遜と云ふ心の非常に强い方であつて、子供の私に恰かも少者の長者に物を尋ぬるやうにして聞かれたことが澤山あつたのです、私は聞かれる每に汗を拭ふやうに考へまして、さうして深く刀自を敬愛したのでございます、所謂下問を恥ぢぬといふ方でした、サウして其胸の廣いことゝ云ふものは、誠に男子にても斯の如き方は少ないであらうと思ひました、色々御話をしたうございますが、唯今申しまする通りの譯で、私は是丈けの聲を出すには餘程苦しいのでございます、そのくせ氣が懸るからツイ大きい聲を致します、今日は少しばかり御話をして置きますが、私は他からも賴まれて刀自の傳を書いて居りますからそれを御覽下さい

それで私は今申しました服部中佐を御吊ひ申すと云ふことに就て申しますが、世人誤つて刀自は唯女らしいと云ふ――如何にも女らしいと云ふとは結構なとで、淑女の德と云ふとは誠に結構で、うれさへあれば何がなくても宜しいのですが、唯だ女らしいと云ふ一方面は能く世の中の人が知つて居られるけれども、男魂のあつたと云ふことは私程知つた者が少ないであらうと思ひます、幸に私は六年ばかりの間日常起居を共にしたのでございますから、其刀自が大變に雄々しい心を持たれて居られ、君を思ひ國を思ふ念などの深いことゝ云ふものは、私は唯今でも男子にすら斯の如き者は多く見ませぬ、さうして何時でありましたか、昨年であつたと思ひます、一日刀自を訪ねました時に、私に向つて「歌子さん何うも年がよつてはいけませぬ、私はあなたと共に居た時のやうな勇氣はありませぬよ、身体が弱くなつて萬事遲れ勝になつて仕舞ひましたからして、今は後世を願ふて歌でも詠む位なことだが、此歌さへも佳き歌を詠まうなどゝ云ふ念もないのです、どうぞ努めて下さい、國家は多事になりました、進んで事をすれば、定めて非難攻擊は段々繁くなつて困難の地位に立たれるであらうが、私は身体が弱くなりましたからしてあなたと宮中に居て共に話したやうなことはモウ殘念ながら行へませぬ、西洋人は如何か知らぬが日本人を見るのに、どうも勝れた人でも六十を多く越してはモウ働けませぬ、あなたも働く年が段々短くなるのですから、どうぞ努力して下さい」と言はれたことは私は骨に刻まれたやうにございます、斯う

云ふことを言ふて下すつた方も聽いて見ると刀自も少なかつたやうでございますから、私も知己の一人と思ひまして誠に嬉しくもあり又悲しくもあり坐ろに懷舊の情に堪へませぬ、私は今日刀自の靈前に向ひまして唯だ一通り吊すると云ふことは尋常一様の友達の間柄であつて、嗚呼がましくも自ら知己と信ずる刀自の靈に向ひましては、私は一言の吊詞をすると云ふことでは實に此儘に死なれぬと思ひます、婦人の責任は男子の責任とは違ひます、決して銃を肩にして外國に出でるのでもなければ廟堂に立つて政治を議するのでもありませぬ、唯だ此家庭、唯だ此社會を如何せん、此家庭と社會との教育を進め風紀を正しうするのですが德が足らず、才が短くしては出來ますまい、出來ますまいが五尺の身体を捧げて其衝に當り、尚又我れより優る所の——有德の人を待つより外仕方がございませぬ、唯だ力が足らぬことは致し方はございませぬけれども、死と云ふものを以て始から先きの國家に盡さなければ、私は再び刀自の靈前に見えることが出來ますまいと思ひます、不肖にして私は申す半分も事は出來ますまい、出來ますまいが、どうぞ皆さん御助け下さい、皆さんもどうぞ御進み下すつて刀自の靈魂をして極樂に安んぜしめると云ふことは、則ち社會公衆の爲めに盡すと云ふことを、どうか御記憶なされむことを冀ひます

（去月二十日四恩瓜生會に於て演說したるものを速記したるものなり）　完

會報

◎近角氏の消息　同氏は既に英京龍動に着せられたる筈なりしが、同氏在米中の消息に關し「新佛教」に左の一項を掲げられぬ借りて左に之を紹介せむ

近角常觀兄の歐米漫遊の途に上るや、（杉村）余之を米國ボストンの一記者、ジョシュア、エム、ウエード氏に紹介せり、ウエード氏は豪商にして記者を兼ね、夙に日本好きと耶蘇嫌ひとを以て知られたり、近角兄を之に紹介したるは、日本佛教青年會の事業に就いて、相談するところあらしめんと欲したるに由る、爾來近角兄よりは杳として何等の消息なし、ウエード氏と會見の始末は、却てウエード氏自身より傳へらる、曰く

四月二十日發貴翰拜讀致候、御紹介の佛教僧は、今朝松本文教(ママ)氏と共に來訪せられ、凡そ二時間許り會談致候小生は曾て聊かも佛教を學びたること之なく候へども、天然に自得せる所のもの有之、隨て小生か佛教に明かなるは、同氏の必ず驚かれたる所なるべくと存候、此事は同氏歸朝の後御聞き取り下され度し、小生は貴下が同氏を御紹介下され候事を萬謝致候、同氏歸國の後は聊か氏の爲めに、一臂の勞を取るべくと存候、同氏の計畫に小生の意に適し候に付、之を進捗せしめんか爲め十分の盡力可致候、（中略）同氏歸朝の後は佛教各宗派の連合一致に力を盡さるべく、之のみにても可なりの大事業に有之候、佛耶兩教を合同せしめんと謀るが如きは、誠に以ての外の儀と相心得られ候、當國の人民は畢竟拜金の徒たるに過ぎず候、日本が基督教を以て、國民一般の宗教とせんなど企て候はゞ、夫れゞ飛でもなき物笑と相成り可申候、敬具

五月二十一日、ボストン發。

また桑港佛教會より六月十五日發行の會報に同氏に關し左の如く記載されたり

歐米宗教視察の途に上られたる、大日本佛教青年會幹事近角常觀氏はボストンより一書を寄せて、事情の許さざる爲め桑港に立寄り、親しく海外傳道の眞相を見聞せざりしを遺憾とし、猶今後相提携して佛教の爲めに盡竭せんことを申越されたり、氏は直に英京龍敦に向け出發せられたる筈なり」と、近角氏がボストンより書を發したるの頃は、ウエード氏と會談の前後なる可きか、遠からずして龍動も消息到るならむ

◎押水佛教同盟會　能州の同會にては盛なる發會式を擧げたる由なるが、當日の模樣を聞くに式場は北川尻恩通寺を以てし、先つ會の成立及其趣旨を述べ、次に祝辭其他數番の演說あり、最後に朝倉氏の演說、說教等ありたり、當日餘興として投餅をなし又有益なる施本を聽衆に配布したり、參會者の重もなるは前貴族院議員岡野是保氏、縣會議員赤池嘉平氏其他各宗僧侶有志者等にして來會三千餘名、頗る盛會を極めたる由、現在會員は二千名以上に達せりと云ふ、事務所は能登羽咋郡南大海村淨善寺內

◎伊香佛教徒同盟會　近江伊香郡の有志は奔走の結果、題號の如き會を組織し來月盛大なる發會式を擧行する由、布施孫一郎氏を會長に、富田八郎氏を副會長に、各寺住職並に各村區長を評議員に擧げ、同郡一圓は擧りて同會員に加入したりと云ふ、尙同會は進て淺井、坂田兩郡にも交渉し、會員募集しつゝありと云ふ、同會規約書は左の如し

第一條　本會ハ佛教興隆德義振作ノ道ヲ講シ行道進德ノ佛語ヲ服膺シテ國家忠信ノ元氣ヲ助長シ慈善的事業ノ發達ヲ謀ルヲ以テ目的トス

第二條　本會ハ伊香佛教同盟會ト稱シ事務所ヲ伊香郡木ノ本村ニ設置ス

第三條　本會ニ左ノ役員及會議員ヲ置ク
正副會長各一名　幹事十三名　評議員若干名　會計係三十九名

第四條　正副會長幹事及會計係ハ評議員會ニ於テ本會々員中ヨリ之ヲ選擧ス評議員ハ各大字若クハ各寺毎ニ一名及上三名以下ノ範圍ニ於テ會員之ヲ互撰ス

第五條　正副會長ハ會務一切ヲ總理シ幹事ハ正副會長ヲ補佐シ諮詢ノ事務ヲ整理ス評議員ハ正副會長ノ諮詢ニ應答シ專ラ本會ノ機關トナリ會計其他百般ノ事項ニ付講究議決スルモノトス

第六條　會計係ハ會計一切ノ事務ヲ掌ル

第七條　會計係ハ通常會ハ毎年秋兩度高僧名士ヲ聘シ大演說會ヲ開キ併テ會員一戶ハ諸般ノ事業ニ付和協進運ノ方法ヲ議ス臨時會ハ臨機必要ニ際シ正副會長ハ諸般ノ事務ニ付會員一般ニ報知シ幹事評議員等ハ會員一般臨時會合スル者トス

第八條　役員ノ任期ハ總テ二ヶ年トス但シ補欠員ハ前任者ノ殘任期トス

第九條　本會ハ佛教興隆德義振作ノ道ヲ講シ行道進德ノ佛語ヲ服膺シテ國家忠信ノ元氣ヲ助長シ慈善的事業ノ發達ヲ謀ルヲ以テ目的トス

第十條　本會ハ伊香佛教同盟會ト稱シ事務所ヲ伊香郡木ノ本村ニ設置ス

第十一條　本會ニ左ノ役員及會議員ヲ置ク
正副會長各一名　幹事三十九名　評議員若干名　會計係

第十二條　本會々員ノ給ヲ地方公共ノ職員ヲ擧グルニ當リ常ニ同一歩調ノ態度ヲ取ルモノトス（下略）

◎第九回佛教夏期講習會開會式

大日本佛教青年會の同講習會は愈七月十一日午後一時を以て駿河國沼津町に開會式を擧行せり、來會者の重なる人は折原靜岡縣參事官、河野駿東郡長、福田、田方郡長、郡視學松崎敬義、町長小出定富、元商船學校長中村六三郎、商業學校長土居寧世、和田傳太郎、伊太郎、足助喜兵衛、市川爲造、和田二三郎、神戶豐三郎、金子太郎、片岡顯矩、室賀隆學士、須田茂馬、杉浦芳三郎、三田久太郎、其他地方有志者諸氏にして、午後一時號鐘開會を報じ一同着席ス代を和唱し、續て、加藤行海師禮讚文を誦し右終て幹事眞岡濯海氏起て開會の趣旨を述べ、河野鑑治氏は地方委員總代として、專門學校生志水文雄氏は同總代として祝詞を述べ、折原參事官は來賓總代として祝辭を述べられたり、佐久間眞淨氏は寺院總代として、清澤學士は起て、佛教講究の必要より漸次歩を進めて氏が宗教に對する信仰の誠心を吐露し一般世人及青年學生の爲に懇篤なる訓誨を與へられ、聽者皆耳を欹て、靜聽し、特に地方人士に對して有力なる感化を與へられたり、次に齋藤唯信師、權田雷斧師加藤行海師各開講、最後に天皇陛下萬歲を三唱し、樓下に茶話會を開き、此に盛なる開會式を擧行せられたり、

十二日よりは文科大學講師前田慧雲師も來會せられ、其他、島地、大內、釋宗演、坂上、江村、守本の諸師引續き來會せらるゝ由なれば盛會の殷を豫想せらる、同會は午後、教育講習會を開き、眞岡、和田、佐竹、加藤、堀、酒生、中尾、內田の諸文學士、教育、倫理、心理、歷史等各專門の學を講ぜら、來十九日頃には靜岡市に出張して印度飢饉救濟演說會を開き、井上圓了博士も同地に出張せらるゝ由

◎横濱佛教講話會に於ける印度飢饉救濟演說　大日本佛教青年會幹事眞岡文學士は去一日横濱臨濱佛教講話會に臨み、印度人ロマカント、ライ氏の爲に通譯の勞を取り、引續き印度飢饉救濟の急を同地人士に訴へたれば、目下同會の澤村善太郎氏は右救助金募集に盡力中なりと

◎寄附　金一圓押水佛教同盟會より御寄附被下候に付茲に謹て厚意を表し候也

廣告

●注意●

本年夏期講習會は西部廣島に開會の旨豫告致置候處、北清事件の爲廣島市は軍隊派遣の要衝と相成、會員の宿泊に差支候間止むを得ず開會を見合せ、東西兩部沼津に合併して相開き候、此段來會の諸君に謹告仕候也

明治卅三年七月一日　大日本佛教青年會

佛教講話錄　第八輯

目次

敦賀港寫眞版挿入……
佛教夏期演習會略歷……
禪海一瀾三十則……釋宗演
佛教我觀論……村上專精師
敦行信證大意略說……島地默雷師
破邪顯正談……清澤滿之師
諸尊宿格言……江村秀山師
圓頓章略解並序……蘆津寅全師
發菩提心論開題……權田雷斧師

本書は昨年七月越前敦賀港に於て開會したる第八回夏期講習會講話錄なり今回製本なりしを以て廣く有志に頒つ

定價一冊貳拾五錢◎郵稅四錢◎郵券代用一割增◎爲替振込局は森川局宛

●發行所　本郷區森川町一番地　大日本佛教青年會

夏期講習會開設豫告

●開設地　駿河國沼津

●會期　七月十一日より二十四日迄二週間

●止宿費　一日滯在費金參拾錢

●地方來會者　は沼津町蓮光寺佐久間眞淨又は大聖寺上村義秀宛申込まるべし

●注意　旅費は東京より沼津迄滊車賃一圓二拾錢を要す來會者は到着の上沼津淺間町東方寺に至り其案内を受くべし

明治三十三年七月　大日本佛教青年會

●講師

井上圓了師　大内青巒居士　脇田晃淳師
加藤行海師　村上專精師　黑田眞洞師
前田惠雲師　權田雷斧師　赤松連城師
齋藤聞精師　齋藤唯信師　坂上宗詮師
清澤滿之師　釋宗演師　島地默雷師
江村私山師　守本文靜師（いろは順）

●教育講習會　本會に附帶して教育講習會を開き、教育倫理、心理、歷史、國史、國文、漢文等の科目中便宜に從ひ之を講し、會員中學士等之が講師に當る

◎本月二十日正午十二時より小石川大塚辻町東京市養育院會堂に於て例會開會

◎導師權僧正　功力日慈師　及道重信教師

○講師　神谷大周師

○院内參觀　○參聽隨意

四恩爪生會